

加藤九祚先生を偲ぶ

山内 和也

Obituary for Professor Kyuzo Kato (1922–2016)

KazuYA YAMAUCHI

2016年9月11日（日本時間12日未明）、中央アジア考古学の偉大な開拓者である加藤九祚先生がお亡くなりになった。かねてからご本人が願っていたように、加藤先生が発掘していたウズベキスタン共和国南部のカラ・テパ（Kara Tepa）遺跡でお倒れになり、テルメズ（Termez）の病院に運ばれ、そのまま息をお引き取りになった。齢94歳であった（1922年5月18日生）。中央アジアを愛し、中央アジア考古学に命を捧げた加藤先生の人生そのものを象徴するようなご最後であった。

加藤先生の思い出の中でも、いまだに忘れることができないものがある。2000年の秋にユネスコ文化遺産保存日本信託基金事業の事前調査のために加藤先生と一緒にカザフスタン共和国のオトラル（Otrar）遺跡に視察に行ったときのことである。アルマトイ（Almaty）での会議を終え、夜行列車でオトラル遺跡へと向かうこととなった。明朝、シムケント（Shymkent）に到着し、皆でオトラル遺跡に向かうバスに乗り込むと、加藤先生は、どうしてもシルダリヤ川を見たいと言いつつ、道の中でシルダリヤ川の支流に立ち寄ることになった。

「これがシルダリヤか、これがシルダリヤか」と何度もつぶやきながら、加藤先生は川岸に歩み寄った。そして岸

辺に流れ着いた長い木の枝を一本取り上げ、ちょうどいい長さに折り、即席の杖をこしらえ、とても嬉しそうであった。その時に一緒に視察に行ったカザフスタンの専門家たちにとって、この光景はとても印象的なことだったので、今でも加藤先生のことが話題になると、いつもこの話になる。中央アジアを愛し、真摯に向き合う加藤先生の気持ちとその場にいた皆に伝わったからであろう。

加藤先生は上智大学在学中、1944年に満州に出征し、敗戦でソ連軍に捕らえられ、約5年間シベリアに抑留された。その厳しい抑留生活と自らの運命を嘆くのではなく、「ソ連に留学したと思えばいい」と、その間にロシア語を習得した。それが、その後の人生を大きく変えることとなった。シベリアの民俗誌をはじめ、中央アジアの自然と歴史、文化に深い関心を持ち、かつてのロシアの探検家、民族学者の研究の翻訳や評伝を次々と出版した。そうした著作からは、さまざまな運命に翻弄されながら生きる人間の生きざまに対する加藤先生の思いが感じられる。お酒がお好きだった加藤先生は、飲むと終いには良く「あざみの歌」（横井弘作詞）を歌っていた。「山には山の愁いあり、海には海の悲しみや」で始まるこの歌に自分の人生を重ね合わせていたのかもしれない。



ウズベキスタン政府より友好勲章を授与された
加藤九祚先生（2002年）



発掘現場に立つ加藤九祚先生
（ダルベルジン・テパ遺跡、2008年3月）

加藤先生が本格的に考古学の発掘に取り組んだのは65歳を過ぎてからのことであった。ウズベキスタン共和国南部のダルベルジン・テパ (Dal'verzín Tepa) 遺跡を皮切りに、テルメズ周辺の遺跡で精力的に発掘調査を行った。加藤先生の興味はウズベキスタンに止まらず、キルギス共和国のクラスナヤ・レーチカ (Krasnaya Rechka) 遺跡でも発掘を行い、中央アジアの遺跡に多くの足跡を残した。その加藤先生が最後まで手掛けていたのが、カラ・テパ遺跡であった。カラ・テパ遺跡は中央アジアにおける仏教の伝播とその様相を解明するうえで、極めて重要な遺跡であり、中央アジアの考古学史に残る調査となった。

先生の数ある著作は私たちにとって中央アジア考古学の道標となっているが、加藤先生が私たちに残してくれた最大の遺産は、自ら現地に足を運ぶことで中央アジア考古学の道を切り開き、新たな地平線を拓いてくれたことである。加藤先生が、長い時間をかけ、苦労を重ねながら生み

出した舞台があればこそ、現在、私たち日本人が中央アジアで活動できるのである。

中央アジアに対する真摯な思いにもまして、加藤先生が皆を引き寄せたのは、そのお人柄である。いまでも、発掘について熱く語る加藤先生の姿、そしてにこやかな顔が思い出される。自らが体験せざるを得なかった厳しい運命を嘆くことなく、それを前に進む力に変え、中央アジアの考古学に挑んできた加藤先生の人生そのものが人を引き寄せただけでなく、誰とでも分け隔てなく付き合う加藤先生の人柄が皆を虜にしたのであろう。

加藤先生は中央アジア、シルクロードに夢とロマンを追い求めていた人であり、それこそが加藤先生の終生変わらぬ情熱を生み出す源であった。私たちが中央アジアの考古学研究の発展のために尽くしていくことこそ、加藤先生の遺志、そしてその夢を引き継ぐことであろう。

山内 和也

帝京大学文化財研究所

Kazuya YAMAUCHI

Research Institute of Cultural Properties,

Teikyo University